

統計の眼

△学校給食と牛乳△

記録的な暑い夏となった今年の夏は牛乳の消費拡大にとつては大きなチャンスでもあった。しかし、そこに発生した雪印乳業問題は消費者の牛乳への不信感を招くこととなり、とりわけ、牛乳は学校給食に欠かせない食品であるだけに、給食現場の対応が注目された。事件は夏休み直前であつたため、混乱は先送りされたものの、二学期からの学校給食では雪印離れが目立つという。

学校給食と牛乳との関係は長い。学校給食といえは脱脂粉乳と言われたように、戦後再開された学校給食は連合軍の放出脱脂粉乳やユニセフから寄贈された脱脂粉乳が主要な栄養源であつたし、昭和三年以降は消費拡大の一環として国産牛乳の供給が始まった。そして昭和三八年にアメリカ産の脱脂粉乳からストロンチウム90が検出されたことから「ミルク給食論争」が起り、これを契機に脱脂粉乳から牛乳に逐次切り替えられ、国産牛乳の供給量は年々拡大してきた。

その推移は表に示した通りで、学校給食への供給量はピーク時には六〇万トンを超え、飲用牛乳に占める割合が一九％にもなった時期もある。中学生への標準供給量を減らした(三〇九g→二〇六g)こと等もあつて、供給量は減つたものの、平成一一年度も供給量は四三八千トン、

飲用牛乳に占める割合も八・九％になっている。これは一年を通じた平均数値なので、実際に学校給食がある期間(年間約一九〇日)をとると、ほぼ二〇％近くになると推定される。

このように市場として学校給食は大きなウエイトを占めているが、さらに重要なこととして教育の一環として、外部からの影響を受け易い児童期に、年間一九〇日、繰り返し実施される学校給食の影響がある。従つて、今後は飼料の安全性も配慮した真に安全で、美味しい牛乳を供給していくことが酪農振興にとつて欠かせない。

(根岸)

学校給食用牛乳の供給量

(単位:千トン、%)

年 度	牛乳生産量		学校給食用(B)		補助単価
	うち 飲用(A)	牛乳の 供給量	B/A		
昭和40年	3,271	1,828	131	7.1	5.00円(180cc当たり)
45	4,789	2,651	477	18.0	5.80円(200cc当たり)
46	4,841	2,685	518	19.3	"
50	5,006	3,179	540	17.0	"
55	6,498	4,010	613	15.3	"
60	7,436	4,307	635	14.7	4.00円(200cc当たり)
平成2年	8,203	5,091	547	10.8	2.20円(")
6	8,388	5,263	494	9.4	以降は支給方式変更 およそ 2.00円(200cc当たり)
7	8,467	5,152	482	9.4	
8	8,659	5,188	473	9.1	
9	8,629	5,122	463	9.0	
10	8,549	5,026	451	9.0	
11	8,514	4,939	438	8.9	

資料:「学校給食要覧」(平成10年度版)、11年度は農林水産省統計情報部より